近いほど深い、「異文化の谷」

最近、流行りに便乗して生成ＡＩを使い始めてみました。文章も画像も、下手な人間よりよっぽどクオリティが高いものが、人間と比べ物にならないほど凄まじい速さで出来上がります。

技術の進歩を感じるとともに、どこか空恐ろしさも覚えるのは私だけでしょうか。某映画のようにＡＩが世界を支配し、ショットガンを持ったロボットが追い掛けてくる未来もそう遠い話ではないのかもしれない・・・なんて妄想してしまう今日この頃です。

ロボットと言えば、ロボット工学における「不気味の谷現象」という言葉を聞いたことはありますか？

人間を模したロボットやキャラクターを作る際、顔や姿がリアルな人間に近づいていくほどに、人間は親近感を覚えます。ですが、そのクオリティがある一定のレベルを超えると、逆にその造形を不気味に感じてしまう、というものです。理科室の人体模型や精巧な日本人形、リアルな顔が描かれたマネキン等をイメージしていただくとわかりやすいでしょうか。リアルである分逆に人間との微妙な違いが際立ち、不気味に感じてしまうのです。

親しみやすいものを作ろうとクオリティを高める、つまり人間に近づいた結果、逆に違和感を強く与えるというのは少し皮肉めいていますね。ちなみに“谷”というだけあって、その違和感を消していくと不気味さは消え、再び親しみを感じるようになっていきます。

さて先日、人権啓発の講演で異文化交流についてのお話を聞いたのですが、その内容にこの「不気味の谷」との妙な符号を感じました。そのお話を少し紹介します。

講師曰く、人は自分たちと全く異なる文化には寛容で、むしろ自分たちと近いが少し異なる文化の方が受け入れがたくなってしまう、というのです。

例えば日本人は家に入る際、靴を脱ぎ、来た方とは逆向きに揃えて上がりますが、これは日本独自の文化です。ご存じのとおり、西洋文化圏では土足のまま家に上がるので、当然靴を逆にして揃えたりしません。

ではアジア圏ではどうでしょう。諸説ありますが古い文化の一種に、靴は脱ぐが逆向きには揃えず、むしろ逆に置くと「早く帰りたい」という意思表示になるというものがあるのです。

靴を逆に置くことに慣れた日本人にとって、靴を脱ぎすらしない土足文化より、なぜか靴を逆に置かないことの方がより違和感が強いのではないでしょうか？

ですが西洋の方から見れば、靴の向きなんてどっちだってかまわないはずです。どちらかが優れている訳ではなく、似た文化だからこそ少し異なる点が目についてしまう。

互いの文化が近しいものである方が、異文化交流は難しくなるのかもしれないというお話でした。

近づきすぎると不気味さを与える、「不気味の谷」と少し似ていませんか？

皆さんが今後外国の方と交流する際、「なんでこうしないんだろう」「こっちの方がいいのに」と文化の違いに戸惑いを感じることがあるかもしれません。そんなとき、今回のお話を少し思い出してみてください。

感じている「異文化との谷」が深くても、実は相手と自分はすぐ近くにいるのかもしれません。